

## 令和元年度博物館協議会議事録（要旨）

### 1 協議会概要

日 時：令和元年9月20日（金）9:30～12:00

場 所：北九州市立自然史・歴史博物館 会議室

出席者：伊澤会長、井上委員、緒方委員、杉山委員、染川委員、富田委員、山本委員、  
三島委員（岩松副会長、近藤委員欠席）、上田館長、石神副館長、福岡普及課長、  
真鍋自然史課長、日比野歴史課長ほか（博物館）

議 題： 1 平成30年度事業実績（博物館年報）について  
2 博物館評価制度の導入について  
3 令和元年度事業計画について

- 真鍋自然史課長より進行がなされた。
- 上田館長より挨拶がなされた。
- 伊澤会長より挨拶がなされた。
- 各委員の紹介がなされた。
- 事務局（係長以上の博物館職員）の紹介がなされた。

### 2 議 事

- 伊澤会長の司会により議事が進められた。
- 博物館より議題1、2および3について説明がなされた。【            】は説明者
- 1 平成30年度事業実績（博物館年報）について
  - ア 概 要【福岡課長】
  - イ 自然史課の事業実績【真鍋課長】
  - ウ 歴史課の事業実績【日比野課長】
- 2 博物館評価制度の導入について
  - ア 概 要【福岡課長】
  - イ 評価シートについて【日比野課長】
- 3 令和元年度事業計画について
  - ア 概 要【福岡課長】
  - イ 特別展開催計画
    - ・夏の特別展「探検！両生類・は虫類の世界」【江頭学芸員】
    - ・秋の特別展「九州発！棟方志功の旅 掘り起こされた足跡と交流」【福岡学芸員】
    - ・冬の企画展「コレクション大集合～モノが語る私たちの暮らしと自然～」【宮元係長】
    - ・春の特別展「(仮) まるごと馬展～馬と人のキズナ～」【大橋係長】
  - ウ 自然史課の事業計画【真鍋課長】
    - ・ジオパーク活動推進事業
    - ・博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業
  - エ 歴史課の事業計画【日比野課長】
    - ・東アジア友好博物館交流事業
    - ・東田地区ミュージアムパーク創造事業

### 3 各委員による意見と質疑応答 ○委員 ●博物館

- 年報をきちんと作成されており、評価シートと年報との連動ができていることを評価したい。評価シートのために新たな努力をするようなことになると、非常に効率が悪くなってしまう。
- 評価基準が気になる。例えば、デジタルデータベースが 1,529 件で「C」となっているが、何だったら「B」になるのか、館内での基準があるのか。
- デジタルデータベース（標本収集）については 5 年間の平均値を基準というふうに考えている。加えて、デジタルデータ化していない標本を、どのように進めていくと、どのくらいの期間で埋まるかということも検討している。これらのことから、昨年度の評価は「C」と判断した。
- 標本の収集評価について、登録の点数だけでの評価は難しい。同じ 1 点でも、クジラと昆虫とではかかる手間が大きく異なる。同定に関する時間やコストも異なる。年報にも反映できるといいと考える。
- デジタルデータベースについては一次資料化の段階と、画像データベース化の段階というふうに、ステージがいろいろある。それを切り分けて、きちんとそれぞれが低く評価されないようにしないといけない。
- 例えば入場者数についてもリニューアル後は増えるということがあるので、すべてについて平均を基準にしてしまうのは危ない。
- 評価指標の括弧内は目標値と書いている。なるべく目標値を挙げたい。例えば学校の誘致活動は 100 回とか、あるいは社会見学・修学旅行は 3 団体で 7,000 人とか、入れられるところははっきり入れているが、数値目標に表しにくいところもある。例えば、特別展で展示内容が良かったかどうか、というところは両方（数値目標以外の指標も）併せていきたい。
- 博物館の発信側の、例えば SNS であればツイート数の件数とか、そういうものもポジティブな評価になる。こういう部分が評価になるような仕組みがあるとよい。
- アンケートは実施しているか。
- 夏の特別展については 2 パターンのもをこの数年継続して実施している。常設展については今後、顧客満足度を測るということも含めてできないか、現在検討している。特別展のぬり絵のコーナーでは、ある期間だけ裏面に簡単なアンケートを掲載し、答えてもらうように試している。今後、手が掛からずに効率的な方法を考えたい。
- 評価の理由を見たら、率直に全部「B」以上に思える。遠慮して付けられていると感じる。評価指標のほうで、ここでの過去 5 年間の平均であったりとかいうことだけではなくて、同規模とか同様な所その他施設の状況との対比の中で、目標値であったり指標などを挙げていただいたりすると、評価結果が外部評価としても分かりやすいが、そういう示し方はできないか。
- 他館との比較についての検討自体は行なっているものの、展示内容が似ていて年間入館者数等も同程度の比較に適した博物館を見つけるのが難しい。
- 現実に即した、無理のない目標値を定量、定性それぞれにお願いしたい。目標値が得も言えぬプレッシャーになることもある。みなさんの努力が見える形の評価をすべきである。
- 本来、ミュージアムの展示面積と出展物と配置の空間状況から、学びに最適な入館者数、例えば 1 時間当たりの人数というものがあるはず。これを評価の基準にしたらい。人数だけ増やしても長蛇の列で待たされることになり、入館者には負担になってある意味よろしくない。

- 国際交流に関する評価を加えてはどうか。
- 国際交流については不定期であるため、項目として加えてしまうと何もないという年が出てくる。項目を設けず総合評価のところで評価していきたい。
- きちんとした年報を毎年作っているところが素晴らしい。評価シートも含めて、普段からアーカイビングをきちんとやっておくことが危機的な状況を回避することにつながる。行政の組織では状況が大きく変わることがありうる。
- 資料の収集だけではなく、資料の保全についても評価すべきである。安定した空気環境を保っている、資料から虫が湧かないなど。いろいろなものを収集しているなかで、資料をある一定的な状態を保っているならば、毎年「A」でよい。防災については、博物館は集客施設である以上、きちんとした防災マニュアルがあって、毎年避難訓練をやっていたら「A」でよい。でも絶対、毎年ずっとやっているということが必要。それから、長期修繕計画について、きちんと意識された計画的な視野を持っていれば、毎年「A」でよい。それがないと、行政職の方は異動もあるし、博物館自体が行政の中のどういう部局に位置付けられるかも不変ではないため、評価項目として落とし込んでおくのが良い。「A」と、ずっと評価されているにもかかわらず、施設や設備が劣化してきたらどうするのかを検討するためにも、特に施設は公共機能の中でそれぞれキープしなければいけない設備のクオリティがあるため、それ（クオリティ）をキープするために、どれだけ普段、計画的に考えているのかという点を評価軸とし、毎年「A」にしていくということで進めていくという形はどうか。
- ミュージアムとして、日々の頑張りと、頑張りによって蓄積された知見・情報というものが、全体として市民のためにいかに貢献できて（あるいは役立って）いるのかという点を評価すべきである。大学の博物館、あるいは県立の博物館、国立の博物館とは違うミッションが必ずあり、それにしたがって事業を計画されているはずである。ほかの所では要らない評価項目だけれど、北九州市立の自然史と歴史系の博物館だからこそ要る評価項目、そして、評価され続けなければいけない項目というのがあるはずである。それらも（評価項目への）落とし込みをすべきである。
- 評価項目づくりで、何十人もいるチームとしての働き、それぞれの職員で志向が違っているなかで総体としてたたき出されてくるチーム力というのが現れてくるようにしてもよいし、またあえてそれを出さないということも手ではあると思う。
- 総合力で評価していただけるとよい。未来永劫この評価シートを使用していくわけではないので、今後、評価シートそのものは適宜変えていきたい。
- 資料の貸出が「B」になるというのは、どういう判断か。1件でもあれば、「A」でいいのではないか。
- この評価のところは、取りあえずイメージをつかんでもらうために、仮に入れたもので、必ずしもそれが確定するというわけではない。
- この博物館の資料寄贈者数はどのくらいか。どんな頻度で資料寄贈があるのか。
- 非常にまちまちで、数万点の昆虫のコレクションを一挙にもらってきたり、市内で採れた貴重な植物1点というケースもある。歴史課でも（寄贈件数の）平均を出すのは難しい。
- 博物館の事業に協力していただくために学芸員自身が協力先に出向き、きちんと企画の内容を先方に伝えて、共感と協力を得てくるという力というのも評価されるべきである。
- 東田ミュージアムパークについて、単館での実施とは違う、キュレーションということができてきている。ここでイノベーションギャラリーに印刷を持っていくとか、環境ミュージアムの紙の再生というものを学芸員が思いつけるという発想の柔軟さというところで、

定性的に評価できるとよい。

- 収蔵庫の整理状況はどうか。
- もうどこも 150%超えている状況。今、1,000 m<sup>2</sup>くらい最低必要というので、市の財政当局に要求している。現在、別の施設で収蔵スペースの確保を検討している。
- 今、その資料整理に携わっている職員というか、それを専門でやっていらっしゃるボランティアはいるのか。
- 基本的には学芸員。自然史系の場合は、植物のさく葉標本の整理にボランティアで、6名の方が来ている。担当学芸員の時間がある時に週に1度程度来ていただいている。
- 最近は寄贈者の方が自ら来られて、自分で標本をずっと整理されて、その都度入れていくという、神様みたいな人がいらっしゃる。結局、そういう人たちに頼らざるを得ないような状況に、恐らくどこの博物館もなっている。受け入れるべき個人コレクションがものすごい量になっている。
- 標本の整理について、現役の学芸員は大変なので、定年で辞めた元学芸員にボランティアできてもらおうというのをやってはどうか。
- コレクション大集合について、博物館学的な内容なので、ぜひ博物館らしい、ライブ感のある内容を期待している。資料を集めて研究するということが一般の人も楽しめるような内容になったらうれしい。博物館の存在意義みたいなものがきちんと形で示せるとよい。
- 東田ミュージアムパークの構想の中で新科学館との連携はどうか。
- ミュージアムパークの実行委員会の中には現児童科学館の館長が入っている。具体的な連携構想は新科学館ができてからになる。
- 小中学生は、常設展は無料で、減免というのとは何か。
- 市内小中学校が学校団体に利用する時である。あと「わらべの日」。毎月第2日曜は、小中学生は常設展入館料が無料である。加えて、夏休み期間中は文化パスポート事業があり、近隣の市町村も連携して、小中学生は無料で常設展が見られる。年間の入館者の約 52%が中学生以下である。
- 今年度から始まった、教員向けの研修プログラムについて、今後もこのような支援を続けて欲しい。
- 真鍋自然史課長より会議の終了が宣言された。

(議事録作成：御前明洋・日比野友亮)